

中隊が敵砲火に向けて出撃しと時お腹に附けて見日に入つてたりました。最干渉の時として
予想外の障害にあはれ、然に予期に反して途中から腹が痛り、随即に水軍船行隊艦艇の出
立すを、尚忍と遙して幕邊へ引上げるの止むるに到つたものが大勇教であります。そ
してこの日の夕刻迄には、遠く那須港附近まで進撃し、特に艦艇に内陸攻撃せんとして白
鷹のためこの目的を達し得ず、同港附近に寄港せる巴音賀外二・三名の中隊員を威りて全員
が基地と荷造りをしました。遂に中隊員は次回出撃への準備を終りて、今度こそなる
程い笑意をいそしそうあります。

四月十日—四月十三日、舟艇作業場
さき間に於いては、次回出撃を予期して、舟艇整備に万全を期しました。第一回り出撃であ
るの舟艇に破損を生じました。尚且論國艦をもとを置き、その整備に全力を傾注したので
あります。特に第一回出撃後、或隊基盤並にその企図を繋めしと水軍は、舟艇を監視附近に
計して、底行燈による偵察、暗夜攻撃を実験して参りました。中隊では舟艇の構造を余儀な
く改良、海岸より中隊員登船を切り詰馬鹿に弱點を強調致しましたが、水空軍調査は迅速に付してお
攻撃を開始し彼らの実験を走欠いたしました。

四月十四日 中隊方ニ出撃

第一回出撃並にその後に於て不規空襲隊、艦砲攻撃に従う護衛を受けたものを残し、約十隻
を完全な战斗可能舟艇と以って攻撃を敢行いたしました。この日は野田鬼留士官以下約十名

の各舟艇の艇隊が各艦に出撃して主に船橋駆逐船艇に向直攻撃し、中止と舟艇を破壊され
て五艦艇を失ひましたのもあり、全般無事帰還いたしました。

四月十五日 中隊長以下率總出撃

この日中隊長以下の名と軍械出撃を敢行いたしました。中隊長が自ら陣頭に立つての出撃に
中隊員一同は感激し、中隊長の取手精神と貴任觀念に日本ニ反敵の念を最も多くの方でしたため
度胸時中隊員以下全員奮起奮闘致しました。時に中隊長は、舟艇整備に付直し正に攻撃せん
ことを堅に廢却ニル、艦上から子彈弾を放下て元居て負傷を受けましたか、駆逐隊下に置
ました、成程と確認して暗ら返事もありました。中隊長は自分自身負傷したこと應じに思ふれ
中隊員がこの戦争を知つたりは幾日のことあります。以上より手からも中隊長より日次の御
意旨を理解致せると思ひます。

四月十六日—四月二十七日 舟艇作業

三軍に於ける事に甲板の舟艇はその船どと風浪強しましたが、二三の舟艇は敵艦の船体上
を通過する見合いかあるとの見当のものにて、この殘存舟艇の整備にかかりました。そして次
回出撃の日と併つたのであります、最後の最後まで自分の目的を完遂せんとする舟艇整備

自殺牛群はこの事に従つても解ること、思ひます。然しながら日一日と進つた後、遂に
戦斗は切迫して参り、不空軍並に艦艇よりの攻撃は激化してまいりました。お出撃命令は幾
つも持つておらず、舟艇船はその子つに運行二水を行きました。

四月二十日、中隊長戰隊本部へ參集、海上部隊への配属命令

戰隊本部よりの呼出しに、中隊長は日没を待つて本部へ行方ました。そして翌三十九日早朝
中隊へ歸らせて、速ちに軍よりの戦隊への命令を傳へられました。命令に従ると日一日と戰
船にて行く海上部隊の戦斗に支軍の若尾は最大を極め、また三次と並る海上戦斗に勝どき直
前を達成せらる戦隊は今度北上オ一戦、鉄隊戦斗に協力すべく、五百一日より石井、山谷、安藤、
龍屋せよとの事であります。故つてオニ中隊は全員石井園にて配属、且暮海上戦斗に參加す
る事となりました。即ち

中隊編成、オニ小隊は石井園大三於艦へ、ミサカを配属すも事に決定しました。
二大隊へ、オニ小隊は同大三於艦へ、ミサカを配属すも事に決定しました。

四月三十日、海上部隊へ參集のため名簿出登

ハシロ「オニ艦長上記隊へ參加すべく零暴を憲つて名簿を出登しました。遂に鹿吉に於て山

矢田へ配属すべく戰隊本部主力オニ中隊は主なオニ中隊と合併し、戰隊長の訓示を受けて戰

隊員同士の最後の別れ後、西鷹丸へぞれぞれ進路致しました。

当時敵立オニ十三大隊はオニ艦隊起陸波奈中間の線をあり、オニ十二大隊は舊里市の北前号

五五

五大

比良町の前線とあり、大十三大隊は比良町にあります。

本軍上陸地點附近に於て、日八水の戦斗に該團全滅の状態となりました大十三大隊は一戦

オニ艦を後退大十四大隊が重奪米軍と對峙してゐたのであります。

この日鹿吉から、中隊指導者オニ小隊は貨物自動車に搭乗、オニ・オニ小隊は徒歩にて、オ
ニ機械部隊にてあります。それぞれの艦艇部隊並びの約五里的進路は、オニ艦へ近づく
ことを防ぐ、遠慮、野宣傳の大砲弾が數を増し、何時何刻も落下さい各か全然子彈を飛んで居
る。一騎たり發送して来る戦争の傍矢を崩さし、また途中で散在する反撃軍を突と「山」づけ
しの名言葉を交しつゝ、一歩も舊里市へ到着致しまして。舊里市に於ける本軍の攻撃は奇襲に
あるほど猛烈を極め、癇的に攻撃されると舊里市は火炎や、炮火人の死体が横たわるに至
り、同舟な三砲陣、野宣傳と爆破を繰り返すの悲劇であります。一方石井園は令狀にて集合
して中隊全員は、休息の暇もなく、速ちにこれを北の陸路先へ移動いたしました。時に四月
二十日も明けて、五月一日午時二時頃であります。

五月一日、オニ艦隊支隊へ到着

アラスカ以下沿岸地方は今風景、半島岬海岸のやや崎の端にて本軍オニ艦と対峙するオニ十三大
隊は、本軍軍事指揮官以下等一小隊員は、陸上自立隊の多く比良町に於て大十三大隊を捕獲
されし立本軍軍事指揮官以下等一小隊員は多く比良町と約十キロの河を越て、陸上自立隊にて二十
人程、到着しましたが、本軍軍事指揮官に於ては本軍の特攻隊の本領とこそ其の餘は餘命で本領の様

ありましたが、一騎三十の中隊員に付し西番の援軍を得たるかの如く非常に怪しきを要けとの
おありました。時に阿波茶に於ては既に水軍の暴烈せる狂撃が内職を見な、また海軍の
水軍工兵連隊兵士腰下に見下され、同海岸沖の艦船泊地も大都會の如く不夜城と認出して居ま
した。

又機合此度迄にて戦斗と從事致しどのであります。中隊員の主なる任務は延命斬鉄と撃
盾壓砲であり、前込み戦法の困難こ心いに及ばず、監視別に外縁はか迷ちて来る大砲陣は
・間断なく艦船の下をくぐつてこの遊轡は、前込みにも優る困難さがありました。前どに海上より
船に駆逐し参謀した所乗上、地上部隊の戦車備足は前込み攻撃等に因する一あの損害研究
があり、以後一艦同を出下して名在場に渡したものであります。

五月四日 軍艦攻撃の日

水軍上陸後一ヶ月余、水軍の軍艦とも近代兵器に付する船と部隊の肉薄々々の戦闘は、水軍
をしてその空襲を置きだらしめ、ある程度の水軍の艦隊をそとこしめたのであります。
この日、軍に於ては水軍をして一導に海岸線まで撤退せしむべく、航空部隊との協同のと
に一大艦攻撃の命令が下りました。第一艦隊突進する事無事に逃げりであります。海防に附
つた航空艦隊の空襲は全然なく、艦攻撃は無事に終つたのであります。

五日大日 第一小隊突進戦死の日

当所寄日恩者士官以下九名の第一小隊は皆里市北側の河口に於て、或は行儀となり、

第三分隊長として船と飛行してゐたのであります。この日、安田昌長は水軍隊想内に深
く侵入して船と飛行し、敵に駆逐する難免を避け、中隊最初の犠牲者となるに至りました。

五月十四日 第二小隊小野田軍曹戰死の日

中隊長の指揮する若林班等二小隊は阿波茶中間の灘流に参加し、双方に水軍の爆弾なる空爆
を受けたので列つて、空爆を避けて、遂に遂に敵に當つて、右立陥り頭の小川の中で船と踏み越へ、女川水
のぶりづ、駆出し、若林市北都知外國の才人、田代國に下りました。そして放國師令郎小野
田と一身に受けた居りました。終し次回の船と船の日々空爆を経て、空爆砲、駆逐艦の陸火薬
を受け、而今訊り立てる二小野田軍曹は、駆逐艦の直撃を受り駆逐する駆逐を終じ
られました。そしてこの中隊中隊長は空爆を受けることを

五月十五日 関川軍長被殺の日

士木恩者士官以下六名の第三小隊は第一小隊と川を距てて、多くは皮肉の丸方の第十二大隊
の伝説をたれり、大隊一中隊の幹部として船と飛行し、或は小隊長として地上駆逐の指揮に
なして居りました。皆外國兵はこの日兵四、五名を率ひて遙く本艦を駆逐する方舟の
空襲船に遇ひ、船と成力は致しましたが、馬上雷轟をせめらざる走りに走りこ
の間に船と飛行を致しました。

六月十六日 空襲重軍の中国都市よりし首里市に寄する水軍の空襲攻撃は空襲を終りました。

そして豊里市の西の方の突出部東側の次第に立磯海岸等では、一連の余り水牛との並び河時
しての勝手が運送され、汽船であつたと又はの大十四日未西空襲の上陸八日から四月六日と思は
れる徑でした。

五月丁大日 石川・岩原高等法院見付

天候に男つて大「西浜田城」にて、豊里市と油屋町より西豊里市に後退しよとの命令が
ありました。然し度に夜の正午に天皇せら御警視日命令を自かへいよいよ五月十七日モ
朝し全員新兵を執行し、全員三群を次第放しました。そして前日即ち五月十六日、旅團幹
事の前衛として三名を逐新して大軍岸邊の廣島を東北の所立みを定め放しました。こ
の選抜たる軍事を極め、詔書が二小隊り石川・岩原西空襲並に御家子院・久司軍事から命令
を發して水軍隊内に新兵を執行しました。そして三名を逐に大軍の醫務課院内に突
入し慰問する戰死とげられました。この三名の水軍隊員への突入の報と、当時施行せる
一起者人によりまだらされました。

旅團裏以下旅團全員が虐待せる石川・岩原・久司三軍曹の新兵の成功とその結果は、翌
丁酉日被爆致しました。附と暗黙長より旅團長に対する者三四回の放逐せよと命じ、而
國長の強団に攻撃せる彼日よりための戦斗力の原有その間に國と幹部を極め、而何なる事もあ
れる放逐せよと諭ぐと諭の末で参りました。放つて一時に旅團全員新兵を放逐せらる旅團
八日。放日のことを思ひ、五月十七日夜半一帯豊里市邊方男は東町に放逐する事に方針を定

五九

六〇

莫ニ承りました。か、既にこの日、久司女優連帶は水軍に古便にて、放逐する事にしてしま
と水は放逐するより又より過度とと思はせる體でした。旅團全員が放逐の困難と責任に降り
ては一層天意致して居りました。そして水軍の小夜戦の如く打ち手・旅團幹事を除け、火砲のこ
め一表して全兵士測する事の出来ないほど行進の困難な進路を豊里市へ向け放逐いたしました。
そして石川・岩原・久司の組合て十分警戒して居りました。か、それが予想と反して全兵あ
ります。立候じる水軍の幹事の姿へ見えません。詔書こねは前日居り十一大日新兵を放
行せる三名に成り放逐させ、水軍は幾日の日本軍の新兵を悉くして置くとありました。而
國長はこら手を別討され、改めて三名の文牒と擴大られました。尚子二小隊の脳してさ
すと大十四日放逐、この日以前にオ一小隊の脳してあた大十三放逐令発の所立放題の直
前市の豊里市邊方男は東町に放逐され、大十三放逐は連日の脳戦とより全く戦力を喪失して居りまし
上、豊里市より放逐致してござりました。

五月二十日、旅團・艦本三軍監戒五日

大丁三放逐と既に豊里市より段々に男つて、日に日に激化して行く水軍の攻撃に対しては、
豊里市東本より海三洋日放逐令を放逐つてお一隊へ野戦を放逐してござりましたが、この日
三隊番はそれを北房連隊として野戦を放逐し、多處東京郊外水軍隊などに新兵を放行し、
放逐する事も放逐されたのであります。かくて豊里市の放逐を除けた事跡は、放軍の次
の海の野公衆滅によって、水軍にかなりの衝撃を與へる事が出来ました。生れと育成し、

千穂の一木に殺した新攻隊員の日廣の殺害はこゝに還暦なく空揮致されたのがありましと。この日昌戦が中止され三名の尊い犠牲者と生じたのであります。以後首里市を留保せんとする米軍は、西は那覇市より首里市に到る所を略々攻撃して西原方よりの迂回を試み、それ故北方よりの迂回を試みて居りました。そして一週間余りの大激戦は、軍休戦部として、首里市死守不辟か、後退して戦力再整備の後に反撃するかの二つの状態に直面させたのであります。遂に焼くまでも米軍戦力の消耗を企図せる軍は、一方首里市を後退する事に次し、大月二十二五六日より逐次首里市周辺にあつてはたたかれた部隊の後退を命じました。そして、四大隊団隊司令官と隊長と同様くして、大月二十七日、首里市南方面へ計の準岳山に登り、那珂双方二小隊の戦隊を放棄と行動を共にしました。その退路にあける矢恩の天尾峯をとる事で、撤退する所をさして置いたのであります。矢恩の天尾峯を奪取しめました。今や首里市の脇谷地帯をなく累々と危機に瀕したのであります。最後まで首里市にあって、完全に撤退を走る市から撤退して来たたりは、二十二大隊より松田軍曹ら等三小隊の配属せる部隊の中であるとのであります。

正月二十九日 小寺軍曹戰死の日

さきに山手軍曹は、分隊長として奮闘中の腹部に直撃砲による重傷を負ひて居りましたが、彼方に警戒される事無く、立本見舊士官以下の戦友と共に最後を守りてやく死く決意して、首里市の最奥を走った日、重傷の身と歌はず令隊長として奮斗中、敵に猛烈なる戦死を

大一

迷びらえたのであります。

大月一日 松田軍曹戰死の日

洋子山に後退した大十四旅団に屬してござりました二小隊は、津岳山に後退する同時に、森田君郎から二十一一大隊へ慰留する事ござりました。当時、二十一一大隊は津岳山の西方約二キロの笠原原野にあつて、若琴連の耐寒軍曹と二小隊の松田軍曹は、旅団司令官と二十一一大隊司令官と連絡をとれずして居りました。益翠砲の猛砲火の中を廻し、敵に殺しに降りて、破壊された足跡の中を挺身進撃して居りました。その勞苦は特筆すべき事であります。これが日進日進益翠台並の急坂を攀り登り攀りいたしました。駆逐戦に忍えて待てる老若の、どいも心てめた軍官の最後なる正に日進の軍曹らしく、益翠砲陣の急坂を攀り登り攀りして行つたと、當時の耐寒軍曹から最後の戦死が傳へられてました。

一旦首里市を後退した軍は、米軍の攻撃を阻止しつゝ逐次南方向へ後退し、その間に於ケ谷の海壁地と内宮よりの戦場との交戦等を企図したことあります。一旦後退して北の武志谷谷底に退きました。そこには今や破竹の勢であつた米軍は、耐寒軍曹と交戦となりました。そこで小寺軍曹と米軍と交戦しつゝ、津岳山、那覇市として歩きました。大十四旅団は以前の中隊の駐屯地を改め、その戦力の変更を踏まえ、そこで小寺軍曹と米軍と交戦しつゝ、津岳山、那覇市として歩きました。大月十五日以降、石垣島に

大二

將軍隊に於けも最後の方ニ十三隊ニあり、山矢田日オ一隊たあつて廿軍は内だよりの前線部隊

隊の水軍隊士への邊上邊に廻行しつゝ戰斗を忍耐いたしました。

大月十六日 鐵百伍員滅死の日

山等に於つた大十三隊因に屢してゐとお一小隊ど、これら漁業時田見瀬ナ宮以下五名であります。鐵百伍員滅死は里界命令を受けて山越から名城に向進して在務にさつて居ましたか、盤坂等の難處の集中攻撃を受けて、中隊の廢毛地であつた名城の御居地監守等のために基に難處に於した。

二の夜から早朝沖縄島端の一帯に據つて最後の警戒をいたしました。然しながら小刀等

内に保有と想つかれ密察したところへ、船行残り暴風、難處り集中攻撃、波風浪、宣空、警

早の艦攻が集中ござり、軍を愈々嚴襲の危機に追ひ込まれたのであります。

大月十八日 遊撃隊長戦死の日

名城に於つた二十二大隊は水軍と衝突して、近接戦斗に入りました。まことに二十二大隊にて、分隊長なりし浦安金次は駆り難儀をそぞろとさせず、自ら令隊長として戦斗に従事してござり申す。二月廿一日鍋田在貞と同僚、名城の一帯に敗つたのであります。

忠臣新なる軍の司令部の所を犯さる者大仁から水軍、名城の西海岸に到り敵がオ一隊とな

り、いよいよ外敵の戰斗の大詫と迫りました。

大月十九日 晩から、軍の生存者は逐次水軍陣地内に入りぬんで斯ムの遊撃戦を展開して

大月

となりましたが、いよいよ軍は最後の危機にござれると至り、各部隊に於て三、四名よりな
る斬滅隊を組織して、次第に水軍陣地に衝入し行つたのであります。

大月十九日 立本見瀬土官、巴監長、土海軍官、村上軍官戰死の日。
この日、廿二十三大隊に於ては經々師近隊が発生ござりました。そして二十二大隊に於つて立
本見瀬土官と村上軍官も欠け、五名と共に名城より長崎東洋岸水軍と並び立本見瀬土官
へ移入みを敢行せんとしたのであります。氣足間に間断なく集中して来る遊撃戦が起
き、立本見瀬土官と村上軍官は相次いで斬滅いたします。

大月二十日 中隊長、中尉軍官戰死の日

軍司令官の參謀長吉田の日

不規則の敵手の終止符を正に一回目の間となり、久軍陣地等の攻撃にて零細化になつて敵行
はれました。

敵軍が船外の大砲を立派に撃て重傷を負はれて敗退し、その敵方艦の火薬庫が爆破され

て爆発して居ます。剝て岸際に倒れござり、敵軍の死傷者にて甚だ多く、岸際にて

して倒らされたあります。その間には敵軍を攻撃するために陸續して、大隊火薬

連隊の集中攻撃下等の猛攻撃を受けて倒りました。倒つて少隊長は憤り涙をして、未だ十分に説教致して居らぬ身の不自由さも含めて水す。二・三日間下足等の名城の本軍陣地内に静かに取行され、然ひなるが死を邊げらんとした。

左方一小隊の中村豊四郎はこの時大十三旅団の連合分隊長として本機に乗りました。豊君は連合軍連隊の集中攻撃に邊り猛烈なる戦闘を邊げらんとした。常に如何なる難事に際しても堅忍は抜群の明識性を發揮なく發揮して、意気消沈し勝ちな分隊長を常に應えしつ。奮闘してゐたのであります。一方軍司令部所在地唐文仁の台止は、完全に米軍に包囲されました。遂に軍司令官、牛島大將、參謀長、長大將皆殺され、田馬鹿を着物にて、如何とお抱き業をなく、終に軍司令官、牛島大將、參謀長、長大將皆殺され、次で南院自決を邊げらえました。

今マ義高君は唐文仁の台止に正碑し、軍の指揮命令は規定に觸り、因だとり無能無能に處え。全く立派として身辺には忠義ござらぬのであります。左方豊四郎は忠義ござらぬと謂ふので、最後まで都下騒動の上に思ひを覺えざるは軍司令官、多謀良々豪傑は實に盡りたるもので、最後まで都下騒動の上に思ひを覺えざるは忠義ござらぬとして朝鮮へ出たうあります。總務課、唐文仁台止の米國陸軍に當歸しました。浦、友軍の虎隊に襲われた米軍司令官ロクナード將の墓と共に同大將の墓と日本米國領域の下に夫しく静かに並んでゐる力が空氣されたのであります。

六月二十二日、野田見習士官、水雷監修、福岡里曾戰死の日

大五

大大

軍司令官が自決である所の最後の言葉は、「生残者日本兵みぞ実施しフ、本軍陣地を突撃し北方山中に集結して反回上陸部隊に呼応して戰斗を開始せよ」といふ意味の言葉だったこ

うであります。大日二十日後にして沖縄本島は日本軍に占領されてゐた。各所に生き残つて居た將兵は既に斬首され更に突撃しつゝ本軍陣地を撃滅してあります。

二日、野田見習士官は、伝令一名を率ひて本軍の台止である本軍陣地に日本兵みぞ取行して、本軍陣地に降りて捕獲す。本軍陣地から經度を受けて「豊子方義」を叫び、猛烈なる戦闘を邊げられました。

一本木連隊田邊隊の最前線を敵と貫徹沿岸中の水雷會員、船頭富長は、海岸沿いに向り前進本軍陣地を猛攻突撃して倒れ、懶次いで船頭等の戦闘を邊げらえました。

左一、以テ攻撃軍は各所に於て猛烈戦を取行しつゝ、北方山中に向け前進し、式川南朝海岸の岩の頭山脈等にあつて食ななく火薬はボビーに刃先で温くらべ、陸手船等と本隊で順りに進撃と撃打して居たのであります。傍つは又久軍の上陸の子、何時か日没軍と相思はる等が出来てゐたと述が水平綱を見つめ時を周三であります。

六月五日、福岡里曾戰死の日、二、三日間下足等の名城の本軍陣地内に静かに取行して、豊君は本軍の船頭等「身を隠し、夜間は軍を隠す子と取行して本軍陣地でござ

してゐたのであります。終にこの日、夜時の新益みにて名城の一舟に放逐したのであります。

了しました。

七月二十一日、出口書長、森定伍長戰死の日

大手町放送局から天守方二十二大隊に屬し、政治行動と共にして立った船と野良宿主官出ロ書長、塙不軍曹、森定伍長、それに舟鳥人の伝令二名計六名は、水賊の海岸の岩場にて漁入し、豊岡は瞬時さま本軍掃島戦に志戦又は身を隠し、夜風は瞬時なく本軍陣地に附りテモ矢を放して石子であります。状況は次第に悪化し、日一日で夜間の新益み寄港に迷惑をする反対は激昂して行くながを、この日も夜間の新益みを放行したのであります。本賊の海岸、嘉里武寄りの本軍陣地を攻撃すべく、大名は正に本軍陣地に前進して直進したのであります。かく我々の行動を予想せるが、本軍陣地前に多數の砲雷が設置してあり、出ロ書長と森定伍長は行動を共にして前進中に落雷し、塙不軍曹の海岸に迷惑する驚きを避げられました。

七月二十二日、橋本軍曹戰死の日

朝日出ロ書長、森定伍長の二名を失つて半晝いやがこと三百席を、この日は一名の傳令と岩瀬に残して、在々野良宿主官と、橋本軍曹と一名の伝令と計三名は、陸方より本軍陣地を攻撃せんとしたのであります。しかし、折衝の月曜と乗組る本軍の戦闘艇に乗り企団を察知され、本軍陣地三十歩前方に於て機銃射撃を浴び、橋本軍曹と傳令を捕獲され水没一瞬、「豊岡萬歳」と大音で叫びて艦頭なる戦死を誇げられました。

六七

六八

最後、終戦するが僅き生存者は各地に散走して匿難する連中戦士を冥滅しました。誰か何等ををして西を立ちのど、毎日毎夜、義友の上に凶運と荷りつゝ、最後の運命を履行したことあります。八月十六日にはつて、本軍よりの終戦の布告書が運行機を以つて各所に投下されました。遂に本軍陣地へ出頭し、生存者たる連は連れ戦士を最後として五名を計へたのであります。船を江田島の一方で武装して中隊長以下三十名をかくして五名となりました。全て此の連は連命なり」といふ愚を強じらぬことを思ひ、五名の生存者は歎願なる本軍に身を投げて斬首のあとを擱びながら、今や連戦が一奏しつくして敵船の増に向つて走つて走つて走ります。

激戦のあと夢にして秋の風
大きい在るこの運命か生きと死と

第三中隊戰斗経過

昭和十九年八月八日、本島たゞこ島上、機兵科二十大隊隊長へ轉成。同日附て、二岸本中隊以下三十一名を三中隊隊長官也。

そ處を守備に送り、後高卒日浦にて日本海防教育が想あらる。而して此の教育の期間が定められ、艦隊改進事務にも身を全く離て出席命令は下つた。

昭和十九年十一月二十日、守備总長就任。

同年十二月十四日、鹿児島守護、中隊は二船に令取中隊長岸谷中尉以下十名遣組也。一調長森義也、留士官以下二十一名、舟山忠也。

昭和十九年十二月十六日、坤洋松、資良國語、島嶼暴風上陸、舟組の整備訓練。

昭和十九年十二月下旬より二十一年一月下旬、沖繩本島島尻郡鹿久里中隊寄碇陣地と守護中隊泊。

名乗員は笠原中隊と天に舟組の整備につとめ、出島に備山など数の空襲頻繁。二月十四日中隊は永瀬町より薩摩監視に派遣、日ヶ原に分居宿石す。

昭和二十一年四月一日、敵機手擲爆弾海岸にて座同日四月一日、中隊は戦隊の軍艦及駆逐艦と共に出立命令を承り、上陸暴風手擲爆弾にて同夜十二時を期し、突入を命ぜらる。午後大隊中隊員不調。

大丸

七〇

仁宗島中隊長以下三十一名、暴風の過に被創の事と解く「暴風出島」の爆破説を以て居た處の若東三木は、はれて先端所を得たる丘びた焉頭を走る暴風に走る暴風に立つて、青年下士官「我島に戴じて、我島に不破水劍法場にて突入暴風に存立し爆破を放下し所の艦艇に撃沈する」の中隊の作戦を岸本隊長は云ふ「脚どと行へば、思甚さ之と云々」と云々と、天荒ありしと半端に御隊長は暴風突入の過力ある予定であつた。進水は八所、最大千葉に四十本過方で爆破し、三リットルは西等の行動を看けるかの兼どし、一艇ひき多くも重しそうい時をし度合一・度合一・解くと大つてさんざんと以つての連打だ十艘半滅に勢ひて本部河野隊長の三日一連起進水次と三歳の内山軍曹の三日二十三連爆進水、零山軍曹の三日二十三連爆進水しつゝある所處に十島一、登校時間だ、隊長は登校番長舞、舞拂写見留士官は河山軍曹に便乗出撃す。(轟)了總中隊長に参りて敢行赴港を多謝を送ぐ。

度合は出来不可避に終り、奇襲基地に取容す、時至る九日、森田更留士官以下中隊番長等に本島中隊今後の業と本名の海軍機動各機動命令を承り、表題を利用して、利用する所の艦艇に寄り、水は寒風、此がうざ居寒二ほつに因紹目遣せらる、十日中隊又は前命を承り、敵艦船の行船跡周囲に警戒の意、全艦速達二七、艦隊自衛艦は艦上から敵襲は即ちの空襲再び艦

日本海軍地に至り整備、警戒の間襲に寄航と、取扱が取し、一艦に見ねべて歸れ風だ。

四月十五日中隊はオニヤクサウルスの命を承り、通報飛行母機十七架十ヶチー、出撃は四日午後、哨戒船は港外入りは十二時以降一組に二名各乗の暴風出島の準備はなつ

と、本連隊に隊員二名、この森がな機関の下に森岡恩習士官以下二十七名出陣を行なうとするのであつた。

島尾部隊は、中隊本部隊、風は速くも遅くも運び行く、最後の警笛が行はる。誰の胸にさ前出陣の犠牲者岸本隊員以下四名の復讐手合を纏め、血は流れる。「反は恩を辱め休むが如き」、あり難い浮舟に浮り、各舟艇内に、と雖太心とさなく白頭山麓か遠水出す。午後七時半邊も用意、宿泊引きつけ共に一舟に合浦。三百十一番艇と若頭にて列隊で、舟々と行く針路北ハア島を立つきつて、横は波もさく、夜風と海水と船の調和を流る。原野と保つ恩全艇十五ノット、船長船を大きく度、支那沿岸方面に西に横より流はれ、次才に度くさり大は累く海岸線と本ほらしリーフは四十本余處出陣、前より針路と矢か藤井行範は國旗状態となり攻陣、艇頭必セリ名未實は、せんとさり振舞、牌を揮ふば天皇之と許三手、難堪、沖縄過境は各艇は領入行動に至り、四月十九日島に前進すに備りしが、恩恩書之部以下二十二名として恩、場管員以下三名奉さりと載せ、並に壯烈空襲死を、其の後アマモ三十艇中残存之毎日監視せるものアマモ少軍は復活、早マ戰隊として機動を擧げし得ず、冒険な状況とせめり。

四月二十日天長の卷筋に渡し、中隊は生存恩全員は上才一隊部隊と戰隊森岡恩習士官以下二十名はオーナー隊と天と六十二所國ご破滅員又下四名はニ中隊と共に二十四所國へ名々甚旨道志願兵と予算員として配属、此の時より中隊は二つに分れ當城了。同日夜間同吉の戰原本部に

奮結機雷戻以下は自動車輜により、オ一隊に出発、大十二時頃には歩行、要塞の印田司令細に向つて出發、同歲十時三十分到着、五月二日夜行軍を以つてソカ山に着陸、荷物は全員火船に於て一時走毛の予定せるも緊急命令に最前線部隊に配属三ヶ所に分遣す。

五月四日中隊は軍艦本部に參照と天と吉里東方知外隊ケ、乞高恩習士官部隊隊形に進出、此の時東海雷與那原島より上陸する敵と首里攻防戦が展開、水と又中隊員の任務は、敵の進撃地に敵洋舟に登入攻撃と同時に後方後退するのだ、夜半を別居二名一艇とせり、黄教火船を守ること、筑波と越り船頭を自捕して前進す、三日夜半カ前進も國旗にして四日各所に着て、夜行軍定の生還に行脚せし入す、此の戰斗に於て安永恩習士官、川原田曾義伊藤金長義、篠川、不戸、山中空賀良祐、

五月五日遂次仕送を終らざし中隊は「ソカ山」に於て再度集結、各々前待兼遊にそれ、
御隠れ、御隠れ、此の頃前日、仲間、西原の旅の名高想に早くも進出せる敵は、登陸の攻撃を期へ、拂ケ、島高處を砲臺、木築中を父ナリ、岸は元守部隊に拂散すれど、何ぞを難く森岡恩習士官、

金次で二十日分隊長として召擇せる森岡恩習士官。

敵は、島高處を砲臺、木築中を父ナリ、岸は元守部隊に拂散すれど、何ぞを難く森岡恩習士官、

心とお邊境我方被取の牧客兼に血りあはがりの治療を受ける状況となり。

五月下旬より大月初旬廿里の軍司令部と共に第一旅たび水名記原と平島兩場に後退し二十日

頭面への既發見と本部と共に高麗城に到達す、尚中隊の患者の名城・天鵞洞窟に收容す。

勝に未じて敵の一擧に出撃大日中旬には水溝、固吉、興慶の據に進出せり西漢山城に此役より一歩も中に入水じて屢次望遠鏡を死守す、しかしれども物質的火薬と機械化的砲に心病神力で勝する事は出来ず十八日田中軍曹戰死十名日記奉書裏、宮原、山仲軍曹戰死。

第一旅隨隊隊は赤毛水溝、崇山、相尾、田村軍曹戰死

大夏二十九日遼に走る川並門本、佐竹西軍曹も前隊と共に第一旅の突厥の突厥を取行せり。二十一日中華三十一名中華各隊は海賊に被害これと並んで名、それより水たて舗と走り方面にきての食料が滅め、一日も早く復讐と心地平やれども負り不自由日如何とも難く前隊は解救身

体の自由・さく脛より邊次敵の轟石に射たるを駆行せり。

終

遣旅道傳の記

おきなは

水 上 不

た・かひはざしがりけり
し・しあうとどろきにけり。

おきなはや・日路のかきりと
せざり来る大いなるをの。

生子の船のただちいどまと
くに居るとひそりにけり。

あ・よひと・ゑにそらやど
くにからまはれりけり。
ひとすがのガ子の毛をださ
かこすなし・五と落せだや。

おきなはのなほの子ことと
つしにしたくありけり。

梅一輪——思ひ出の記——

足立富美

私より先に故元の内閣を読んでゐた母が太った。かくもあふ誕生日永らへて戯つて下さつた御本公「半分はなし」。一步我が家に足を入れた時私は壁すらぬものを感じ母の言葉を耳にしたのだつた。既年のこの日お又明日の日も絶命あつて戯つて居たのだ。歿が沖縄島へ上陸又原三ヶ月、河原にあつて私が苦悶に明り暮れしそ日々又彼の苦悶の日々であつて季を慕ひ合はす時沖縄暮の日の暮しこが一時に実感と合つて手と迫つて来るのだつた。あれは豈男らしく豪勝で健全だつて體なさうでない。感情的空虚したことうちひしがれて心でくら子供の生涯に拘する我哉や批判こへ出来かぬて私は想付を過して事だらう。一年有餘を過さん今でさへ懐に思ひ出でば豪勝の子が頭をもたげて次にさるご承こうになら當分と稱はうまいだゝしい氣持で應ある。

日本武士道の最後の最後だつた。と風は餘り事を自分にだけ自棄してゐる。その最後に一輪の花咲くほど持る望んだお懸念に實は盡むる、散つて餘情を残したものだ。昭和十六年の秋さかが、戰局と子孫してゐた彼が自ら達人で洋服と買つて出た財華と後で知りその心中をひそかに遺察し次なることを思ひかつたのであるが、彼としては忠誠と清ちた死所を戰場に求めんと欲した事は十分に察しらるものである。高志理想と絶辞する國家親はタキいらざり氣持で應ある。

七五

私とご説え、その実戦力人々とらんとして彼の歩いた精神過程を延べれば未だ成るがらず「忍しに覺えたる一種の感心」の血子どろの體の底を思る心地がする。

小年の廣大なる夢と抱きその天皇成らずと見るや大いに憤慨し、自暴自棄し筋力は伴ひ餘りに弱け口と毛皮しかぬたまに思へる娘達の時代を櫻川中學時代に置してゐる。然し夫君は常に娘達に忠実に土官学校教育は娘の生涯の工がつくを教つたものである。その精神と鎌倉し、彼の思想に自信と扶助とを教へるにあづかつてなつたと思ふ。娘が愛と日本をひさとく跡よくもこ此程の恩寵的成熟をもたらした事に驚くのであるが、せよ年々娘の生涯と女房空想の間に生じ得たる職のきみつた豪勝年若の生若を重して娘が体得しどとの娘の母性の豪勝の一程の抱きの豪勝があつたと想ふ。夫人としこ苗に教化して娘がほるかに望みし假方からなる貴によるとありて至りものへの憧憬をもつた。開港の港町と母體に恋慕して娘はつと娘に一つ愛されださりばつて居た豪勝の子であつた。遂に娘の手をこゝ豪勝を追つゝ時代の趨勢を愛さし忠厚し、一步進きて詩念し静かに豪勝と娘の娘を取る態度も見だやうな気がする。彼が別離した感想は美しい詩余のすに書り一人居の宿城と味わう事、何か廣いそ故が家めて一人嘗しんだなりばつて居た豪勝の子であつた。遂に娘の手をこゝ豪勝を追つゝ時代の趨勢を愛さし忠厚し、一步進きて詩念し静かに豪勝と娘の娘の中に居し得たるかそれにはして娘に書いて居た豪勝の子であつた。君へ娘の本源代こと娘の生誕中最も娘のと水たニユーブーンに育むつかしい時代であつた。故の詩念にひそん

七六

であるこの廬を據る所、それは宗教的に信頼する哲学的立場の力であった。この思想に潜む教は今は大戦後や開下を想起し、至々かしい古里の河を念ひ、身を想ひぐる嘆息の瞬間ともしたのでつた。つまり既に覺醒して、抱いたために生さんとし人生に一つの肩掛の勇氣等を思ひしだのであつた。それも局隈であると同時に力の集中と意味するものであつた。集中は又方の上昇でなくしてはならぬ。残る生命を生きつくさんとしたこの気持が大図を予想しつゝ舌自ら津縫へ次死行と取行させたのであつた。今こそ教は自らがよく吉つたやうに「金もいらす、恩仇もいらす、命もみうね」男子を終つてしまつた。

故が宇品早雲に於て故友の柳原政に告げた「昔へ全員犠死することよくやつたと言つて實を度へ」と云ふ秋刀の言葉にその次へと譲りと共に、あの時代の日本人の叶びであつて手を銘起し度いと思ふ。大月せ三日、軍司令官一同より自決勧奨され、己は敵の皇國下にありちばれ行動不可解となりたる時も頗る一つ平素と殊なく大膽を日本刀の柄にこしき了度を擱置職業をさざりと思候るじりに生れ目がつぶお養の相談をしたと本山医家の林子を采本氏より傳ひ、私としてもは何を乞言んやである。この忠見、御水とも時に歎り傳さりしもの。被の精神にして萬葉の來ニヘ彼の死と贈して乃はしきうござらう。やうな気がする。忠を晦りながら別海鷹の跡小川島義水盡が夏れる。あの急義水盡を通つて教は皆成程亡率を此を塗に上つたのがつた。今では教と幼年時代を過した古里の家を満ち子つかしい眠りである。よく地からぬこと一語に結めこま水と物置小屋、常に遠かの庭として榮し人びを象水盡の

寄里。廿年の時運と空間を超えてシャツ一枚に浮つて海辺に遊ぶ幼い體の姿が夢寐として私の胸窓に浮つて来る。この寄り水呑み聲の聲を走り、又世界の身に纏く事を思ひますかに斯る心を私に取り戻して貰た。

娘が遊つて我捨めて夙夜涙の聲つて字んだ大分中学故の故郷ミク方歩いて見た。二、三字した義理の秀でし学生一人として幸なく、しく予り朝ヨリ遅つて故郷に通馬た驛でれた故郷が、がらんどうに立つてゐる。この光景は淋しいと言ひよりも、さつと切ないものと感の餘にさきつけた。暮色せざる西隣の景色を背景にして、寄つてはこの故郷と争ひ、こゝより出慈しそ人物が「父と作らん」とした、あり繪畫を舞台に遊んで終つた。悠久り「父と共に脚立か誇つてゐる。此美様はどこに歸つてゐるかであらう。その下の裡に立てる事立てんとして健氣なる大中健児は善ごとへ行つたのからう。――その健氣こそ世に知ら止むれて、一才子を恩へば假舟といとはしむ心に風はしばらく泣いてゐた。三十年の广大の恩久枝は一瞬の間に變りて、多くの痛苦を私の胸に感せしめる。あれ今教等一人として幸なく、難勝山頭に立つて、多くの方々を私に取られやらぬ聲のすゝり泣きのやうに耳朶を拂ひた涙のがつた。

故足立陸生中佐ヲ想フ